

## 発達障害児へのキャリア発達支援（楽集クラブ 3・9・1）

事業責任者： 廣澤 愛子（教育地域科学部附属教育実践総合センター・准教授）

代表学生： 吉川 麻衣（教育地域科学部・3年）

<b>概 要</b>	発達障害児へのキャリア発達支援について 楽集クラブ 3・9・1 は発達障害を抱えた子どもへのキャリア発達支援を行う活動であり、福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター臨床部門が主催している。1 年間の活動を通して、①発達障害のある子どもが社会性（主体性・他者理解・協働性）を身につけること、②発達に弱さを抱えた子どもの保護者が、子どもの良い面を見つけて伸ばす係わりを身につけること、③特別支援教育や生徒指導・教育相談に携わることを目指す学生が、教師になった後も活用できる、発達の・心理的課題を抱えた子どもへの専門的支援の在り方を体得すること、の 3 点において本活動が有効に機能することが明らかとなった。これらについては研究会などでその成果を報告したが、今後も本活動を行いながらその成果報告を続け、臨床実践（地域貢献及び教職志望学生の支援力育成）と研究の双方に貢献したいと考えている。
<b>関連キーワード</b>	発達障害、キャリア発達支援、保護者支援、教職志望学生の個別支援の力量形成

### 事業の背景および目的

楽集クラブ 3・9・1 は、2011 年 4 月に始まった事業であり、今年で丸 4 年を迎えた。発達の弱さを抱えて社会適応に困難が生じている子どもにソーシャルスキル・トレーニングなどを実施し、子どもの障害特性に応じた“キャリア発達支援”を行うことを目的とした療育活動である。

近年急増する引きこもりや未就労の背景には、発達障害が隠れているケースが多いが、彼らの障害特性を考慮した就労支援を体系的に実施する機関は極めて少ない。そこで本事業では、大学生・大学院生と教員が協働し、①発達障害のある子どものキャリア発達を促進し将来の就業力を育成する、②発達の弱さを抱えた子どもの養育に携わっている保護者に対して、専門的見地から支援を行う、③特別支援教育や生徒指導・教育相談に携わることを目指す学生が、教師になった後も活用できる、発達の・心理的課題を抱えた子どもへの専門的支援の在り方を学ぶ、の 3 点を実施することを目的とした。

本事業の独自性は、発達障害のある子どもの就労支援やその保護者の子育て支援を行う（＝直接的な地域貢献）と同時に、教職志望の学生がこの活動を通して専門的な支援方法を習得し、将来教師として、発達障害を抱えた子どもや不登校の子どもに対する支援や引きこもり緩和に寄与すること（＝間接的な地域貢献）である。

### 事業の内容および成果

#### 【対象者及び対象地域】

福井市近郊に住む、発達障害のある子どもとその保護者

#### 【活動内容】

活動内容は、以下の 6 点に集約される。

- ① 一人一人の子どもの学習の進度に応じた、個別学習活動（→基礎学力を培う）
- ② 一人一人の子どもの自主性・創造性に委ねた、自由活動（→主体性・自己決定力・自己肯定感を培う）
- ③ 複数の子どもたちが協働して行う、全体活動（→自己主張と他者理解の両立、すなわち社会性を培う）
- ④ ③の活動を発展させた、キャンプや販売活動といった実践活動（→就労に直接つながる実践力を培う）
- ⑤ 保護者への面談やアドバイス、さらに、医療機関や教育現場との連携
- ⑥ 事前ミーティングと事後ミーティングを通して、教職志望学生が専門性に裏打ちされた係わりを習得

### 【活動日程及び活動回数】

第1週目を除く火曜日(16時50分～18時20分)の通常活動と、夏季・秋季・冬季に特別活動(半日～一日)を実施。1年間を通して35回の活動を行った。

### 【成果】

①子どものキャリア発達の促進に繋がる、社会性と基礎学力の育成、②保護者の育児負担感をサポートし、必要な場合は、医療や教育の現場と連携、③学生の教職専門性の獲得、の3点が達成された。

#### (1) 子どもの社会性と基礎学力の育成

①については、各々の子どもの発達段階に応じた学習力の向上、及び社会性の発達が見られた。特に、社会性の発達については、活動場面のビデオデータ分析を通して実証的に明らかにすることができ、3・9・1の活動が、子どもの主体性、他者理解、そして協働性の育成に繋がることが明らかとなった。その成果については、昨年度の3rd IASSIDD Asia Pacific Conferenceにて研究発表を行ったが(“Influence of the attitudes of workers on independence and sociality of children with developmental disorders in small group activities”, *Jornal of Policy and Practice in Intellectual Disabilities*, 10(2),p.129, 2013), 今年度はその成果について研究会などで検討し、さらに分析方法などをブラッシュアップした。このように、3・9・1の活動を行いながら、その活動内容をビデオ記録におさめて分析することによって、どのような係わりが子どもの社会性の育成に繋がるのかを実証的に明らかにする取り組みを続けており、来年度は、ブラッシュアップした分析方法を用いて、その成果を日本心理学会において報告する予定である。

#### (2) 保護者支援

保護者への面談を強化し、年に2回の面談期間に加えて、随時保護者の希望で面談を行うこととした。保護者は、子どもの発達障害の特性によって、育児におけるストレスを抱えやすくなっている。さらに、発達障害に起因した二次障害への対応にも苦慮している。今年度は、保護者や子どもへの直接的な支援に加えて、医療との連携や教育現場との連携なども行い、より広い視点から保護者への支援を行った。

#### (3) 学生の教職専門性の獲得

将来特別支援教育に携わることを志す学生が、その専門性を身につけることに本活動が寄与することは、これまでの学会発表からも明らかであるが、(近藤信一郎・松井富美恵・廣澤愛子・武澤友広・小越咲子(2011) 教職志望学生の個別支援の力量形成～発達障害児への SST 活動の企画・運営を通して～ 日本教師教育学会第 21 回大会発表論文集, 144-145), 今年度も、本活動に携わった学生が支援対象児への支援活動をテーマとした卒業論文を執筆しており、その内容からも、子どもの社会性の育成と共に、学生自身の個別支援の力量が形成されていることが明らかとなっている。

## 参考文献・添付資料および特記事項等

### (1)参考文献

- Aiko Hirose・Tomohiro Takezawa・Sakiko Ogoshi(2013): “Influence of the attitudes of workers on independence and sociality of children with developmental disorders in small group activities”, *Jornal of Policy and Practice in Intellectual Disabilities*, 10(2),p.129,2013.
- 近藤信一郎・松井富美恵・廣澤愛子・武澤友広・小越咲子(2011) 教職志望学生の個別支援の力量形成～発達障害児への SST 活動の企画・運営を通して～ 日本教師教育学会第 21 回大会発表論文集, 144-145.
- 小越咲子・廣澤愛子・武澤友広・三橋美典「発達障害児の母親と支援者間をつなぐ ICT を用いた交換日記帳システム—日々の協働から育むペアレントトレーニングを目指して」,発達研究, vol.27,155-160, 2013.

### (2)特記事項

特になし